京都大学若手人材海外派遣事業　ジョン万プログラム（職員派遣）

平成25年度職員短期派遣海外研修報告書

研 修 者	職　　名	医学部附属病院総務課一般職員
	氏　　名	酒井　悠助
研修先等	渡航先国名	ブータン王国、タイ王国
	研修先機関名	ブータン医科大学、 日本学術振興会バンコク研究連絡センター　等
	研 修 期 間	平成 26 年 1 月 20 日　～　平成 26 年 2 月 28 日
研修概要	平成 26 年 1 月 20 日から 2 月 27 日までブータン王国(以下;ブータン)のブータン医科大学[University of Medical Science of Bhutan　以下;UMSB]を中心に事務支援や医療ニーズ調査等を行いました。 また、2 月 27 日にブータンからタイ王国のバンコクへ移動し、翌 28 日まで日本学術振興会バンコク研究連絡センター【以下;JSPS】等へ訪問し、東南アジア地区の医療、教育、研究等に関する情報調査を行いました。	

研修成果	<u>ブータンでの業務内容</u> まず、本業務を始めるにいたったきっかけ等について説明させていただきます。2013 年 10 月に UMSB、ブータン保健省そして京大病院が職員の交流や教育、研修の協力等に関する協定を結びました。この協定に則り、ブータン保健省傘下のジグミ・ドルジ・ワンチュク国立紹介病院【Jigme Dorji Wangchuck National Referral Hospital 以下;JDW】等に医師、看護師が派遣されることとなりました。 私はこの第二陣派遣隊の医師、看護師らとともに彼らの秘書として同行しました。業務は UMSB の事務室をお借りし、ビザ申請関連書類等の作成、日本との連絡などの秘書業務を UMSB の国際担当スタッフの方と協力しながら進めました。また、事務組織が UMSB ではまだ十分に整備されていないことから、事務を整備して欲しいと先方の事務部長の方から依頼され、事務改善事業を実施しました。具体的には実態を把握するため、アンケート調査を各スタッフに実施し、問題を把握した上で困っていることがあれば直接伺い、手伝いました。たとえば、Word や Excel の有効な使い方やウィルスソフトのダウンロード、ファイルの整理などです。 その他、次回派遣のニーズ把握の為、UMSB や JDW のブータン人医師、事務スタッフにインタビューを行いました。 <u>仕事の進め方について</u> ブータン人の方の多くは学校教育のほとんどを英語で受けていることから、英語が堪能で、コミュニケーションの手段は主に英語でした。手紙やインタビューシート等を作って自分が何をしたいのか、言葉と紙で伝えて仕事をしていました。 また、ブータン人の方は親切な方が多く、私が日本からやってきた経緯を伝えるとほとんどの方が進んで協力してくださいました。 研修中はなるべく顔を覚えてもらえるよう、仕事、プライベートを問わず、多くの人と会いたくさん話すよう心掛けていました。結果多くの方から親しんでいただけたと思います。 <u>**JSPS 等への訪問について**</u> ブータン王国での業務を終えた 2 月 27 日から 28 日までバンコクにあります JSPS、独立行政法人　日本学生支援機構タイ事務所、大阪大学バンコク教育研究センター、京都大学東南アジア研究所バンコク事務所を訪問しました。ASEAN 圏の優秀な学生や研究者を留学させる取り組みや、東南アジア圏全体の拠点となっていること、約 30 もの大学がバンコクに進出していることなどの情報を得ました。非常に有意義な意見交換をさせていただきました。

研修成果	<u>研修で得られたこと、成果</u> この研修で良かったことは、異なる文化の方と仕事をする方法が養われ、英語力が上がり、外国人の方とのコミュニケーションをとることに自信を持てたことです。しかし、事務としてブータンで働く方法を模索するのに時間がかかり、積極性の不足、英語能力の低さ、異なる環境での生活や習慣に慣れるのが遅かったことから、思ったよりも業務がはかどらなかったことが反省点として挙げられます。しかしながら、事務改善へのアドバイスや医療に関するニーズ調査などの業務は日本からメールで支援し続けたいと思いますし、外国人留学生らと英会話をするなどして、スキルアップしたいと考えています。 成果としては、ブータンの方との顔の見える関係ができたことは大きいと思います。今まではメールでやりとりするだけでしたが、Face to Face でやり取りをしたことで信頼関係が生まれ、日本とブータンで遠く離れていても仕事が進めやすくなったと実感しています。また、日本の医学教育プログラムや外国人医師の受入制度を紹介することで、本学での教育・研修に興味を持ってもらいましたので、人事交流を進めるきっかけを作れたのではないかと感じています。